



有限会社柏崎青果
(青森県)



株式会社早和果樹園
(和歌山県)

株式会社いでほく
(静岡県)



特集

成功モデルから学ぶ 地域のチカラを結集した 6次産業化

高い付加価値を持つ商品の開発、販路開拓の突破口、ファンドを活用した事業展開など、本誌「6channel」では、これまで様々なキーワードから6次産業化の取組事例を紹介してきた。今回は、地域資源を活かし、地域の人々と連携した「地域のチカラを結集した6次産業化」をテーマに、「第2回 6次産業化推進シンポジウム」で優良事例として表彰された6事業者の取組を紹介していく。



やまいもまつり有限会社
(山口県)



株式会社恵那川上屋
(岐阜県)



株式会社御菓子御殿
(沖縄県)

※2015年2月に「株式会社お菓子のホルシェ」から社名変更



第2回 6次産業化推進シンポジウム
~農林漁業の未来創造戦略~

第2回シンポジウムでは、50の事業者(自薦・他薦)の中から、収益性、成長性、バリューチェーン、イノベーション、地域貢献、社会貢献といった幅広い項目について、現地調査やプレゼンテーションを重ね、6事業者が表彰された。シンポジウムに出席した農林水産省食料産業局長櫻庭英悦氏からは、「先駆者として取り組んでいる6次産業化は、地域全体の成長を産業化していくひとつのツールだと確信しています」といったコメントが寄せられた。
(2014年11月25日 日本橋三井ホールにて開催)



有田みかんの魅力を活かした 6次産業化で地域活性化！



早和果樹園では創業メンバーの女性7名を含め、60歳以上の女性たちが元気に働いている。また、地域の同年代の輪を広げ、やりがいのある人生を満喫してもらうため、60歳以上のシニアレディーを活用するための子会社「早和なでしこ」が設立された。

1億円を売り上げて
ハワイに行こう！から
はじまった地域連携

「第2回 6次産業化推進シンポジウム」で(株)早和果樹園は農林水産大臣賞を受賞。地元のみかん生産農家やJ A、行政、大学、企業などと連携して、みかんを原料とした加工商品を次々に開発。看板商品の「味しぼり」(720ml/税込1300円)をはじめ、美味しさにこだわった商品を開発し続け、その6次産業化の取組と実績が評価された。

早和果樹園の地域との連携のはじまりは1979年。7戸のみかん農家が結集して、早和果樹園の前身となる早和共撰を創業したことからだった。メンバーは全員、みかんが高値で取引されていた時代から、1968年、1972年の二度の大暴落を経験。社長の秋竹新吾さんも、その一人だった。「同年代のみかん生産農家が集まり、『力を合わせて、とことん美味しいみかんを作ろう！ほんまもんで勝負して、いこう！』という誓いを立て、早和共撰を設立しました」と秋竹さん。そして、「1億円を売り上げて、みんながハワイに行こう！」というスローガンのもと取り組んだのが、品種改良した完熟早生みかんの生産だった。

1991年には、この言葉どおりみかん農家7戸14人のハワイ旅行が実現。「品質にこだわること」の意義と達成感を味わった。

2000年に入り、それぞれのみかん生産農家に後継者が育ち始めた頃、事業計画を整備していくために、組織は法人化へと動いた。「今までの農業とは違うことをしていきたい。夢を描ける農業にしていきたい。」と当時を振り返る秋竹さん。選果場も増設し、統一的に品質を選別できる光センサーの機械を導入。農業法人として、国県市から補助事業による支援も受け、再スタートを切った。そして、みかんを原料にした、加工商品の開発に2003年から取り組みはじめた。



都市と農村の交流を目的に、早和果樹園で毎年開催されている「アグリファンクラブ」。2014年は約300名が参加。みかんの収穫体験や大もち投げ大会など、工夫を凝らしたイベントが行われている。